

特集

ラーニングコモンズの可能性

— 横浜キャンパスの「ミニセミナー」を事例に —

高田 昌幸 李 洪千 永盛 祐介

近年の大学教育は、研究支援より学修・教育支援に重きを置く大学教育改革が重要視されている。2010年に発表された『大学図書館の整備について』は、大学改革の一つの方向性として大学図書館の強化を強調している。そのなかで図書館を変革する具体策として提案されているのは、学生の主体的な学修成果を向上させるための「情報リテラシー教育」や「ラーニングコモンズ」の整備である。東京都市大学横浜キャンパスの図書館は、2018年10月から3回にわたってラーニングコモンズの一貫として「ミニセミナー」を開催した。

キーワード：大学図書館、ラーニングコモンズ、ミニセミナー、イベント

「ミニセミナー」は、旧図書館をラーニングコモンズとして改修したことを記念して企画されたものである。イベントを通じて学生の知的好奇心を刺激し、学習の場として図書館の機能を認知させることを試みている。さらに、ラーニングコモンズとして図書館をどのように活用できるか、そのノウハウと経験を蓄積する狙いもある。そのため、教員の専門分野に限定しないテーマ選びや昼休みの30分間という時間を設定した。ここでは「ミニセミナー」の内容を紹介し、その結果について考察を行う。「ミニセミナー」内容は以下の通りである。

第1回ミニセミナー

2018年10月10日の初回は、メディア情報学部の高田昌幸が担当し、文藝春秋社から新著『捜す人 津波と原発事故に襲われた浜辺で』を上梓したばかりのジャーナリスト廣瀬正樹氏（元日本テレビ報道局ディレクター）を招いた。この本は子ども2人を津波で失いながら、原発事故のため捜さが叶わなかった男性、及び、その周辺に集うボランティアらの様子を描いた力作で、発売と同時に高い評価を獲得した。本学教員らを別とすれば、学生が著名な書籍の執筆者と直接対話できる機会はそう多くない。その意味からも初回ミニセミナーは「著者と会い、対話する」ことに重点を置いて企画した。

廣瀬氏が主に語ったのは「なぜこの本を書こうと思っ

たか」である。同氏自身、最初は2人の子どもを捜すボランティアとして現地に向かった。当時はまだ日テレ社員。多忙な業務を縫って夜行バスで移動し、そのまま帰京する日々も多かったという。そうした中、本来は許せない相手であるはずの東京電力副社長との親密な関係を知る。なぜ2人は協力関係になったか。そこが本書の核心であり、このセミナーでの力点でもあった。

「世の中に完全な白か黒かはない。社会も人間関係も複雑であり、それを伝えるには短時間のテレビニュースや文字数の少ないネットニュースでは無理。長く書く必要があった」。廣瀬氏は大意、そう語った。ネットもテレビも、ニュースがどんどんエンタメ化し、真剣に真面目に生きる人々の思いが伝わりにくくなっている、とも語った。短絡的な見方を捨て、多様な視点を持って、複雑な世の中を読み解いてほしい、という学生らへのメッセージである。

廣瀬氏は後半、高田とのトークも展開。そのなかで人々に会って話を聴き、1冊にまとめる苦勞と重要性を笑いも交えて披露した。本には先人の知恵が詰まっている、という言葉もあった。何年もかけた研究や知見、取材成果などを凝縮したものが書物であり、読み手はそれを短時間で吸収できる。それが書物の威力なのだといった言葉の数々。それらには著者としての実感もこもっており、参加した学生・教職員も大いに感じ入ったに違いない。

第2回ミニセミナー

11月8日の2回目はメディア情報学部の李洪千が担当した。李は、「激動の韓国を知るための3つのキーワード」というタイトルで、朝鮮半島の状況を3つのキーワードで説明した。李は韓国でジャーナリストや大統領選挙に参加した経験をもつ。2回目のミニセミナーは

TAKADA Masayuki

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科教授

LEE Hongchun

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科准教授

NAGAMORI Yusuke

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科准教授

表1 ミニセミナーの概要

	日時	担当・発表	タイトル
1回	10月10日(水)	高田昌幸	『捜す人 津波と原発事故に襲われた浜辺で』 (文藝春秋社)の筆者(廣瀬正樹氏)とのトーク
2回	11月7日(水)	李洪千	激動する東アジアを理解するために必要な『韓国を知る3つのキーワード』
3回	12月7日(金)	永盛祐介	『創造的活動時の脳血流計測』

「リアルな韓国, 日本では感じられない韓国」を伝えることに重点を置いた。3つのキーワードは、「分断」「民主化」「K Culture (文化の力)」である。3つのキーワードが、今日起きている朝鮮半島での全ての出来事を説明できることではないが、なぜ今のような状況が発生しているのかについての理解を深めることには役にたつであろう。

朝鮮半島の政治的状況を理解するために必要なキーワードの一つは「分断」である。今日朝鮮半島で起きているあらゆる現象は、このキーワードから説明できると言っても過言ではない。南北関係だけではなく、韓国の民主化過程、また、日韓関係もこのキーワードを理解せずには語れない。そのために、なぜ朝鮮半島は分断されていたのか?ということを考えないといけない。朝鮮半島は、北と南に2つの国に分かれて70年ほどになる。朝鮮半島が南北に分かれていることは、朝鮮半島の夜を撮影した衛星写真で象徴される。明るく映っている韓国と真っ暗な北朝鮮の違いが鮮明に写っている(1)。

この写真のように朝鮮半島が南北に分断された原因は何か。その理由のひとつは、日本の植民地支配を挙げられる。終戦を向かって朝鮮半島に駐屯している旧日本の「朝鮮軍」の武装解除のために、ソ連と米国が南北から朝鮮半島に入ったことから南北分断は始まった。終戦のための米ソの軍事行動がイデオロギー的対立に発達し、それが南北におけるそれぞれの政府の樹立に繋がる。さらに、朝鮮戦争による同じ民族間の殺し合いと国土の廃

墟化は、南北分断の解消をさらに難しくしている。南北分断には、植民地に対する清算の問題とイデオロギー対立という2つの層が複雑に混じり合っている。講演では、地図をもってDMZ (DeMillitarized Zone) (2) の状況を説明した。DMZは軍事境界線を基準に南北に2kmずつ離れた非武装地帯が帯のように西から東まで繋がっている地域のことを称している。ただし、DMZは陸地だけに存在しており、海上では相互が主張する境界線がいじり回っていることからこれまで何回も軍事的衝突が起きている。

2つめのキーワードで紹介されたのは、民主化(市民のパワー)である。韓国は1987年の民主化闘争を通じて、民主化が進んでいる。その出発点になったのは1980年に起きた光州事件である。民主化を求める市民の要求を独裁政権が軍事力で踏みにじり、2000人以上の市民が虐殺された悲惨な事件である。韓国では光州抗争・光州民主化闘争とも呼ばれている。この出来事は1987年の民主化運動の火付け役となった。1987年の民主化闘争によって独裁政権を倒した。また、2016年にはロウソクデモを通じて、朴槿恵大統領を弾劾させた。87年の民主化運動は流血事態を伴っているが、2016年のロウソクデモは平和的に行われた。平和的で非暴力に行われたロウソクデモは、世界的に注目を受けている。

3つめのキーワードは、K-Cultureとして代表される「文化の力」である。2003年ドラマから始まった韓流ブームは、2012年以降に拡散されている日本の嫌韓ムードによってなくなると予想されていた。しかし、その期待と異なり2016年以降はK-POPを中心にした韓流ブームが再現している。地上波に韓流ドラマの編成がなくなり、音楽番組に韓国の歌手が出演しなくなったにも拘わらず、K-POPのブームは広まるばかりである。ドラマのファン層は、40代以上の女性が中心であるが、K-POPは10代から40代まで若い人のファン層が厚い。若手のファン層が多いのは、K-POPがインターネットを通じて拡散されることが多く、その背景には日本の情報化の進展がある。若手の90%以上がスマートフォンを保持し、それを通じてインターネットにアクセスしている。また、K-POPは音楽だけではなく文化や生活に



図1 第1回ミニセミナーの様子(右側は講演者の廣瀬氏)



図2 第2回ミニセミナーの様子

も影響を与えているようである。アフリカのある地域で、若いK-POPのファンがスマートフォンでハングルを学んでいる場面が見られる。

最近では、映画やクラシック、ミュージカルなどの人気も増えている。光州事件をテーマにした、「タクシー運転手」(4月21日公開)を含め45本の映画が2018年に公開されている(3)。2019年にも「麻薬王」「国家破綻の日」などの映画が公開される予定である。嫌韓本に対する批判を受けて韓国社会、歴史に関する本の出版も続いている。朝鮮戦争を扱った「朝鮮戦争はなぜ終わらない」(五味洋治)や文在寅大統領の自伝「文在寅自伝、運命」が翻訳出版された。

第3回ミニセミナー

永盛は「Measurement of creative activities by NIRS - Focused on subjective evaluation」というタイトルで、近赤外線分光法(NIRS: Near-infrared spectroscopy)を用い、椅子をデザインする課題に対する主観評価と脳活動の相関について検討した研究について発表を行った。この研究は、人間の感性プロセスの一つと考えられるデザイン活動に焦点を当てたもので発表概要は次の内容である。

人々がデザイン作業を行っている際に、その条件の違いによって「難しさ」や「満足感」に差を感じることもある。その感じ方の違いを、脳の活性化度を計測するNIRS(近赤外線分光法)装置を用いて観測可能かを検証した。

NIRS装置は脳の表層に流れる血液に含まれる酸素化



図3 第3回ミニセミナーの様子

ヘモグロビン濃度上昇量、すなわち脳の活性の度合いを測定することができる。この装置を用いてデザイン作業を行っている際の人々の脳血流を計測した。

デザイン作業は「カワイイ椅子」を、レゴブロックを用いて制作する作業。白色のブロックだけを用いる作業と、8色のカラフルなブロックを用いた場合の2つの条件を設定。13人の実験協力者にこれら2つのデザイン作業を課した上で、「どちらが難しかったか?」、「どちらに満足したか?」、「どちらが創造的に感じたか?」、「どちらの結果に満足しているか?」の4つの質問をした。

その結果、「難しさ」を感じた作業とそうではない作業を比較した場合、「難しさ」を感じた作業において、特定の測定部位の酸素化ヘモグロビン上昇量が有意に高い値を示した。すなわち「難しさ」を感じた場合脳の活動量が上昇することが示唆された。

また「満足感」を感じた作業とそうではない作業を比較した場合、「満足感」を感じた作業において、課題完了に近い時間帯で、特定の測定部位の酸素化ヘモグロビン上昇量が有意に低い値を示した。すなわち作業完了に近いタイミングで「満足感」を感じた場合脳の活動量が下降することが示唆された。

なお、「創造的」と感じた作業とそうではない作業、「満足」と感じた作業とそうではない作業の間に、脳の活動量の顕著な差は見られなかった。

レゴブロックによる椅子のデザイン作業という限られた条件ではあるが、デザイン作業に対する困難や満足感について、脳活動の面から検討できる可能性が示唆された。

3回の企画を通じて次のような内容が確認された。まず、ラーニングコモンズの空間的有効性である。図書館の1階であること、入り口から直接見えることで、イベントが実施されていることが認知されやすい空間であることが確認できた。次に、静かさを求められる図書館のイメージから抜け出せなかった学生らがイベントを通じて、ラーニングコモンズの趣旨と具体的に運用のやり方について認識することになった。最後に、「ミニセミナー」を通じて学生・職員・教員間の知的な交流の場として可能生があることを確認できた。2019年は、以上の経験を生かし「ミニセミナー」の内容を多様化し、学内における情報の共有を試みていきたい。

注

- (1) <https://www.sciencephoto.com/media/662968/view/korean-peninsula-at-night>
- (2) 非武装地帯とも呼ばれる。
- (3) http://www.wowkorea.jp/guide/movie_info.asp